

福井県植物分布ノート(5)

若 杉 孝 生

アマナ *Tulipa edulis* Baker (Amana edulis Honda) ユリ科

アマナはヒメニラやカタクリなどと同じように代表的な春植物の一つである。春早く葉をのばし、いち早く開花結実して夏にはすでに休眠期に入ってしまう。このためもあってか、アマナやヒメニラなどは県内あまり産地が知られていない。

アマナは日本では福島、新潟以西に見られ、中国に分布する。鱗茎を食用に出来ることからアマナという名がついているほど、地方によっては普遍的な植物であるが、どういうわけか本県の山野にはほとんど見ることがなく、福井県にとっては稀産種の一つと言つていい。

本県で最初にアマナを記録されたのは、福井市立郷土自然科学博物館の初代館長、故堀芳孝氏で、同館発行の福井県博物同好会会報第2号(昭和30年3月)の「新採集報告(2)」に、昭和8年作成の福井県生物目録への追加の形で報告されている。(同. P. 107)産地は三方郡三方町神子と記されている。また福井市立郷土自然科学博物館発行の資料目録(2), 植物標本総合目録(1973)によると、同博物館には、前記堀芳孝氏採集による標本と、若狭の植物研究家故今井長太郎氏の採集による標本(この産地名は三方郡西田村となっている。西田村は現在の三方町である。このことから今井長太郎氏が採集されたのは、堀芳孝氏が採集されたのより以前であることが推測される。)の2点が所蔵されている。

その後現在に至るまでの26年間、アマナの産地は具体的にどの地点なのか知る機会もなく、また他の新しい産地も発見されないまま経過し、「三方町神子」の地名は幻の産地となりつつあった。

たまたま昨年(1980)10月、前記今井長太郎氏による「昭和33年編 若狭植物目録」が遺族の手により出版された。それによると、アマナの産地は「神子小字小浜桜の下道」と記されていて、産地解明への一つの示唆が与えられたようであった。

ところで本年4月他の目的もあって常神半島を訪れた筆者は、出来ればアマナの産地も確認したいものと期待していたが、偶然にも半島の先端常神と神子の中間地点で、このアマナの群生を目前にすることが出来た。

この地方では、山麓や山腹を切り開いて、比較的傾斜のゆるい草地に梅林を育成しているが(これがいわゆる西田梅である。現在では福井梅と改称している。), その林床や周辺にツルボ, ノビル, アマドコロ, ホウチャクソウなど、同じユリ科のなかまと共にアマナが多数群生していたのは大変興味深く、その周りにはヤマザクラ, ヤマナシ, ヤブツバキ, クサイチゴ, シロバナタンポポ, タチツボスミレなどが花ざかりで、早春ののどかな桃源郷ならぬ梅源郷の眺めはまた

格別であった。

しかしこの地点は、前記今井氏の記されたく神子小字小浜桜の下道>とは明らかに異なるので、さらに神子まで引き返し、いろいろ調べた結果、問題の産地はく神子の地籍のなかに小浜(こはま)という字があり、そこにあるヤマザクラの下の道>と解するのが正しいようであった。実際、小浜地籍で青磁色の細長い葉をみたときは、(惜しむらくは花をつけていなかった。)長年の件案が一挙に解決した喜びを禁じ得なかった。



梅林の林床（アマナが見える） 常神半島



アマナ (*Tulipa edulis Baker*) 常神半島

福井県におけるアマナの分布



故今井氏が採集されたころは、現在のように県道も拡幅されておらず、神子までいくにも1日がかりであったろうし、やっと通れるような険しい狭い山道であったときいており、立派な県道がついた現在も、この常神半島の〈神子小字小浜桜の下道〉が破壊されずに残ったことは、望外の喜びであった。

こうして思いもかけずアマナの旧産地と新産地を併せて確認することが出来たわけだが、生育地はいずれも梅林の林床及びその周辺で、前述したようにノビルやツルボ、それにヒガンバナなどいわゆる史前帰化植物と言われている植物と同居していることは、注目すべきことと思われる。アマナも全じく隨伴植物の一つだと言われているが、アマナが、何故福井県では稀産種なのか、その辺を探ってみるのも興味深いことであろう。

＜主なる参考文献＞

大井次三郎：日本植物誌（1975）

奥山 春季：日本野外植物図譜Ⅰ（1964）

前川 文夫：史前帰化植物について 植物分類、地理第13巻（1944）

堀 芳孝：福井県博物同好会会報第2号〈新採集報告(2)〉（1955）

福井市立郷土自然科学博物館：同資料目録(2)植物標本総合目録（1973）

今井長太郎：昭和33年編若狭植物総目録（1980）